

私的自己意識特性と公的自己意識特性に関する一考察

—対人的自己嫌悪感との関係から—

A Study on Private Self-Consciousness and Public Self-Consciousness: In Relation to Interpersonal Self-disgust

神 田 信 彦*

Nobuhiko KANDA

要旨：本研究は私的自己意識特性と公的自己意識特性との関係を対人的自己嫌悪感と関連付けることによって検討した。133名の大学生を対象に自己意識特性尺度と自己嫌悪感を測定するための項目群からなる質問紙調査を実施した。その結果、私的自己意識特性と公的自己意識特性との間に.3台の有意な相関を、対人的自己嫌悪感と両自己意識特性と.4~.5台の有意な相関を得た。さらに対人的自己嫌悪感を統制し、私的自己意識特性と公的自己意識との返送係数を算出したところ無相関となった。この結果について自己注目の過程の観点から考察を行った。

Keyword：自己注目, 自覚状態, 私的自己意識, 公的自己意識, 対人的自己嫌悪感

問 題

自覚状態と自己意識特性 自己意識特性は自覚状態とともに自己注目に包含される概念である。自覚状態は人がビデオカメラで撮影されること、録音された自身の声を聞かされることや鏡を提示され自身の姿を見ることによって生起するとされる自分自身への注目状態を表している。

自覚理論には幾つか前提がある。おもなものを挙げると、(1) 私たちの意識は自分の内側に向けられている（自覚状態が高まっている）か、外側に向けられているかのどちらかである（Wicklund & Hormuth, 1981）。(2) 自覚状態が高まった人はその状況に関連度が高いか重要度の高い自己の側面について理想とする評価基準と現状との比較が行われる。(3) この比較で現状は一般的に評価基準に達しないため負の感情が生起するとされ、負の感情を解消するため自覚状態を回避するか、評価基準に自己の状態を合わせるようにするとされる（Wicklund & Duval, 1971 ; Duval & Wicklund, 1972）。

これにたいして自己意識特性（以下、自己意識）は自己への注意の向けやすさの個人差をあら

* かんだ のぶひこ 文教大学人間科学部

わすものであるとされる (Fenigstein, Scheier, & Buss, 1975)。Fenigsteinらは、自覚状態へのなりやすさの個人差を測定するために自己意識尺度を開発し、その過程でそれが私的自己意識と公的自己意識2つの下位特性に分かれることを示した。私的自己意識は、専ら自己に関する思考や内省のおこないやすさを表すものとされ、その対象となるものは自分の感情、気分や動機などである。公的自己意識は、社会的対象としての自己（自分の言動や外見など）への意識の向けやすさを表すものとされている。

私的自己意識と公的自己意識は類似した側面と異なる側面を持つことが明らかにされている（押見, 1992を参照）。例えば、石原・水野（1992）は、両自己意識がセルフモニタリングと有意な弱い正の相関をそれぞれ有することを報告している。一方、公的自己意識は自己標的意識と弱い正の相関が見られるが、私的自己意識は無相関である（Fenigstein, 1984）。近年の本邦における研究を見ると（Table 1）、押見（2000）は公的自己意識が孤立回避動機と公明正大動機と有意で弱い正の相関がみられるが、私的自己意識は両動機と無相関であることを報告している。大仁田・崔（2013）は、公的自己意識が痩せ願望と有意な弱い正の相関を持つが私的自己意識は無相関であることを報告している。また、相関があるとする報告とないとする報告が混在する領域もあり、外山（2002）はFenigsteinら（1975）の自己意識尺度の邦訳版を作成し両自己意識が社会的比較（志向性）との間にそれぞれ正の相関をえている。一方、大久保・下田・鈴木（2015）は菅原（1984）の自意識尺度を用い、社会的比較（傾向）と公的自己意識との間に有意で高い正の相関を得ている。一方、私的自己意識との間は無相関であった。このように私的自己意識と公的自己意識は類似の特徴と異なる特徴を持つことが示されているが、関係づけられる変数によっては異なる結果を得ているものもある状況である。

次に両自己意識間の関係については、多くの研究で有意な弱い正の相関（多くが.3台）を報告しているが、菅原（1984）の尺度を用いた研究では有意で弱い正の相関（.2～.3台）をえているものと無相関のものがみられる。このように無相関の報告が幾つかみられるものの一定の相関関係があるという報告が多数を占めている。私的自己意識と公的自己意識とは、どのように関係しあっているであろうか、あるいは関係しないのであろうか。

対人的自己嫌悪感 押見（1990）は、実験場面で自覚状態を誘導する刺激として挙げられたものの他に、「自己注目を生起させる力を持つ社会的刺激は、いうまでもなくこちらを注目している他者の存在である。」とし「日常生活でのさまざまな社会的、対人的性質を持った自己注目誘導刺激の分析が必要である。」と述べている。自覚理論が扱うのは、実験室内で社会的文脈を排除され、鏡と対面しあるいはカメラで撮影される等の状況で経験される自覚状態の喚起である。日常場面では、他者の存在する社会的文脈や、個人的活動の文脈の中での自覚状態を考える必要がある。例えば、ふとその日の友人との会話を思い出し、おかしなことを言ってしまったことで自己嫌悪感を抱くことや、自分で決めたことを実践できない自分をふがいなく思うことなどをあげることができる。これらの場合のように、自覚状態が先行するのではなく、何らかの結果を受けて自覚状態が喚起される場合もあると考えることができる。

例として挙げた自己嫌悪感について詫間（1978）は「自分の行動、自分の容姿、自分の性格など自分に関するものを眺めたり考えたりしてそれに不充足感を感じることを自己嫌悪という。暗く沈んだ気分と自己収縮感がこのとき体験される。」と述べている。詫間の記述は自己嫌悪（感）が自己注目の過程で生じる負の感情であることを説明しているとも言えよう。

Table 1 先行研究における私的自己意識、公的自己意識及び他の変数との関係

	使用尺度	他の変数	私的自己/ 他の変数	公的自己/ 他の変数	私的/公的 の相関	備考
菅原 (1984)	自意識尺度 (菅原, 1984)	対人不安 自己顕示性	.05 .14**	.31*** .40***	.14**	
菅原 (1986)	自意識尺度	賞賛されたい欲求 拒否されたくない欲求	.1 程度 .1 程度	.59*** .44***		
石原・水野 (1992)	自意識尺度	セルフモニタリング	.26***	.20***		
押見 (2000)	自己意識尺度 押見他 (1986)	孤立回避動機 公明正大動機	-.04 .03	.27** .23**	.33**	
植木他 (2000)	菅原尺度				.07	
外山 (2002)	Feningstein, Scheier & Buss 尺度の翻訳版尺度	社会的比較志向性 能力比較 意見比較	.39** .38** .31**	.56** .58** .21**		
宮崎・押見 (2009)	自己意識尺度	対人不安	.19*	.30***	.38***	
谷 (2010)	自意識尺度	共感的関心	.28***	.18*	.34***	女子
中間 (2012)	自意識尺度				.32***	
大仁田・崔 (2013)	自意識尺度	痩せ願望	.05	.21***	.16***	
大久保他 (2015)	自意識尺度	社会的比較傾向	.11	.73**	.23**	
本研究	自己意識尺度	対人的自己嫌悪感	.47***	.54***	.33***	

*** $p < .001$; ** $p > .01$

目 的

そこで本研究では、私的自己意識と公的自己意識について負の感情である自己嫌悪感との関係の分析を通じて、自己注目における両特性の位置づけを検討する。上述の押見の指摘も踏まえ、特に対人的な場面に対する自己嫌悪感（以下、対人的自己嫌悪感）の観点から検討を行う。自覚理論から敷衍すると、対人的自己嫌悪感とは、対人行動場面での自分を振り返り、その際に負の感情が経験され、なぜ自分は自己嫌悪感を抱くような言動をしてしまったのか、悔やみ、さらには内省することが一般的であると考えられる。そのため公的自己意識及び私的自己意識ともに対人的自己嫌悪感とは正の相関があるものと推測される。

水間 (1996) は自ら作成した自己嫌悪感尺度と公的自己意識との間に男性で $r = .277$ ($p < .001$)、女性で $r = .346$ ($p < .001$)、私的自己意識との間では男性に関して $r = .282$ ($p < .001$)、女性に関しては無相関という結果を得ている（菅原の自意識尺度との間での相関）。水間は、自己意識特性と自己嫌悪感の関係について原因帰属の仕方を説明に用い、私的自己意識の相関の性差については、自己評価の際に重要とされる側面が男女によって異なることによって説明している。

水間の自己嫌悪感尺度では、自分についてさまざまな否定的感情や認知を抱く程度を問う項目で構成されている。水間は自己嫌悪感を「客観的事実はどうあれ、否定的な感情や事象が自分自身に由来するとし、自分が自分自身のことをいやだと感じる」と定義し尺度を作成しているが、同尺度では自己嫌悪を抱く対象や領域は抜かれていないため、他の尺度を用いることとした。

方 法

調査時期 2014年1月の心理学系科目の授業終了時

調査対象 文教大学の学生133名（男性46名、女性87名）

質問紙の構成 自己意識の測定 押見・渡辺・石川（1986）の作成した自己意識尺度を使用した。これは私的自己意識と公的自己意識を測定するそれぞれ9項目、合計18項目からなる尺度である（Table 2）。回答の選択肢は「よくあてはまる」「あてはまる」「少しあてはまる」及び「あてはまらない」の4件法によった。

対人的自己嫌悪感の測定 上地・宮下（2009）による自己愛的脆弱性尺度の短縮版のうち自己顕示抑制因子を構成する項目を中心に、対人的自己嫌悪に相当すると考えられる6項目を使用した（Table 3）。回答の選択肢は「よくある」「ときどきある」「たまにある」及び「ない」の4件法によった。

倫理的配慮 ①当該調査は成績等の評価に一切関係のないこと、②回答は強制ではないことと無記名でありプライバシーは保障されること、③回答したくない項目は回答しなくてもよいこと、④途中で回答をやめてもよいこと、⑤研究以外の目的に回答を使用しないこと、⑥回答済みの質問紙は厳重に管理し一定の期間経過後適正に廃棄すること等を質問紙表紙に記載するとともに、実施に際し著者が読み上げ、説明を行った。

Table 2 自己意識尺度の因子分析結果（主因子法、プロマックス回転）

項 目	公的自己 意識因子	私的自己 意識因子
いつも自分の容姿に気を配っている	.69	-.21
人が私のことをどう思っているか気になる	.68	.01
人にいつもよい印象を与えようと気を遣う	.66	.01
自分を相手に見せるときは注意深くなる	.63	.04
何かするときには人の目を考慮する	.62	.07
自分の振るまいが場違いではないかと気になることがある	.54	.19
出かける前には必ず身だしなみを確かめる	.51	-.24
写真を撮られるときはよく写ろうとする	.50	.00
どうやって自分の気持ちを示そうかと気になることがある	.48	.33
何かにぶつかったときは、自分の心の動きに気を配る	-.02	.64
自分がどんな人間であるのか、いつも理解しようと努めている	-.04	.64
自分が幾分距離を持って自分を見つめていると感じることがある	-.28	.62
自分の気持ちの変化に敏感である	.04	.57
自分の本当の気持ちに注意が向きやすい立ちである	-.09	.55
自分の行為や考えに矛盾がないか、いつも反省する	.24	.38
自分を反省してみることが多い	.22	.34
あまり自分ということを意識しない立ちである*	.04	.15
自分自身についてはあれこれ考えない*	.07	.08
負荷量平方和	3.85	3.02

* 逆転項目； 因子間相関 .431

(因子パターン行列)

Table 3 対人的自己嫌悪感の主成分分析結果

項 目	成分	
	1	2
人と話をした後に「あんなに自分を出すのではなかった」と後悔する	.88	.07
自分のことを話すぎたと思って自己嫌悪に陥ることがある	.87	-.01
人と話した後に話した内容について後悔する	.84	-.02
他の人に自分の事を自慢するような話をした後、後味の悪い感じが残ることがある	.79	.11
他の人から批判されるとそのことが長い間ずっと頭にこびりついて離れない	.74	-.27
相手が私を避けているように思えると私は非常に落ち込んでしまう	.73	-.45
人と話すときは自分の話題で時間をとりすぎないように気をつけている	.51	.78
固有値	4.23	.90
寄与率 (%)	60.43	12.83

結 果

自己意識尺度の因子構造と項目の確認 自己意識尺度 18 項目を対象に 2 因子指定の因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。結果は Table 2 の通りである。押見らの原尺度と同様の項目に分かれたが私的自己意識因子の項目のうち 2 項目で因子負荷量がかなり低い値であったので以後の分析には加えないこととした。

対人的自己嫌悪感の 1 因子性の確認 上述の 7 項目に対し、主成分分析を行ったところ、Table 3 の結果を得た。抽出された成分は 2 つであったが、寄与率、項目の構成及び負荷量から 1 因子構造と考えられ、第 1 主成分を「対人的自己嫌悪感」とし、第 2 主成分にも負荷量の高かった「人と話す時には、自分の話題で時間を取り過ぎないように気をつけている」を以後の分析には加えないこととした。

各尺度の平均値及び信頼性 各尺度の男女別及び全体の平均値は Table 4 の通りであった。性別を独立変数とする平均値差の検定を行ったところいずれも有意な差は見られなかった。さらにそれらの信頼性係数（アルファ係数）については、私的自己意識 .74、公的自己意識 .83 及び対人駅自己嫌悪感 .90 であった。これらはいずれも以後の分析にあてても差し支えない数値であると判断された。

自己意識特性と対人的自己嫌悪感の関係 私的自己意識、公的自己意識及び対人的自己嫌悪感の積率相関係数は、Table 5 の通りである。私的自己意識と公的自己意識は有意な弱い相関が存在し、それらと対人的自己嫌悪感との間にはそれぞれ有意な相関が見られた。この結果は、私的自己意識と公的自己意識との間の相関関係は擬似的なものである可能性を考慮し、対人的自己嫌悪感をコントロールし両自己意識の偏相関係数を算出したところ、無相関であった（全体 = .09 (n.s.) ; 男性 = .08 (n.s.) ; 女性 = .11 (n.s.)）。

考 察

対人的自己嫌悪感との関係について 私的自己意識と公的自己意識との間には、多くの先行研究と同様に有意な正の弱い相関がみられ、それぞれ対人的自己嫌悪感と中程度の正の相関がみられた。このため対人的自己嫌悪感をコントロールした両自己意識の偏相関係数を算出したところ無

Table 4 各変数の男女別平均値と t 検定の結果

			t 値	自由度	有意確率
私的自己意識	男性	19.11 (4.06)	-.58	131	n.s.
	女性	19.51 (3.59)			
	全体	19.37 (3.75)			
公的自己意識	男性	22.7 (5.14)	-1.47	131	n.s.
	女性	23.94 (4.34)			
	全体	23.51 (4.65)			
対人的自己嫌悪感	男性	19.89 (5.34)	-1.10	131	n.s.
	女性	20.97 (5.39)			
	全体	20.59 (5.38)			

(男性 46 名、女性 87 名)

Table 5 各変数間の積率相関係数

		公的自己 意識	対人的自 己嫌悪感
私的自己意識	男性	.26***	.46***
	女性	.37***	.48***
	全体	.33***	.47***
公的自己意識	男性		.42**
	女性		.61***
	全体		.54***

(***) $p < .001$; (**) $p < .01$)

相関となった。このことは公的自己意識と私的自己意識とがそれぞれ独立した変数であることを改めて確認したこととなろう。私的自己意識と公的自己意識は、対人的場面で経験される負の感情を契機として結びつくことが推測される。つまり、自己嫌悪感は、諸研究において定義は定まらないものの、自己注目の過程や結果によって経験される不充足感などの自分に対する否定的感情や気分である。不充足感の生起にあたり当該の人物は、自分の言動や生活ぶりについて注意を向け、自分の公的側面への注目が先行し、私的側面である自己嫌悪感を抱くと考えられる。本研究では、自己嫌悪感を対人的なものだけに絞って対人的自己嫌悪感として自己意識特性との関係をみたが、上に述べたような対人場面に限定しない自己嫌悪感と同様の過程を経ると考えられよう。したがって特性としての私的自己意識と公的自己意識が対人的自己嫌悪感の抱きやすさとそれぞれ正の相関をえたことの根拠として推測される。

私的自己意識と公的自己意識の独立的関係について しかし、両自己意識の独立的関係については、測定尺度が持つ特徴が関係する可能性もある。自己意識特性尺度の項目内容から両自己意識の関係を検討してみよう。押見・渡辺・石川 (1980) の自己意識尺度のうち私的自己意識を構成する各項目 (Table 2) を眺めると、「何かにつづったときは、自分の心の動きに気を配る」「自分がどんな人間であるのか、いつも理解しようと努めている」や「自分が幾分距離を持って自分を見つめていると感じることがある」をはじめ自己理解のための自己注目を示す項目で構成されていると考えられる。一方、公的自己意識を構成する項目は、「いつも自分の容姿に気を配っている」「人が私のことをどう思っているか気になる」や「人にいつもよい印象を与えようと気を遣う」など印象操作 (印象管理) のための自己注目として理解できる項目で構成されている。さ

らにこれらを時間軸で捉えると、自己理解はおもに現在やそう遠くない過去に関わるものと考えられ、印象管理はおもに現在、及び現在に近い将来にかかわるものといえよう。このように対象とする自己注目の側面の違い、そこに関わる時間定位のありかたの違いが今回の結果をもたらした可能性も考えられる。

時間的的定位がそれぞれ異なる公的自己意識尺度項目と自己嫌悪感の関係について さらに、対人的自己嫌悪感、過去（おそらくおもに現在に近い過去）に定位された自己注目の結果生じる不快感であると考えられた。その前提として対人場面での自分の言動を振り返ることがあり、契機として公的自己の側面があるが、負の感情が生起することにより、その感情だけでなく問題となっている言動に関わる自分の性格など私的側面にも注目が及ぶものと考えられる。この場合、公的自己への注目は対人的自己嫌悪感と同様に過去（おそらく現在に近い過去）である。しかし上述のように公的自己意識を測定する項目群は現在や現在に近い将来を想定した内容で構成されている。つまり対人的自己嫌悪感の生起に関わる公的自己の側面はすでに経験したことであるのに対し、公的自己意識の項目群は今及びこれから経験する社会的場面となっており、この観点からは、両者に今回得られたような相関関係があるとは想定しにくい。しかし公的自己意識による社会的側面の自己の意識しやすさは、個人の中で時間的定位を超えて一貫して存在するものであるとすれば、今回の結果は納得いくものである。

さらに、今回の結果は、前述した水間（1996）の研究（自己嫌悪感と私的自己意識との間の相関関係が男女で異なっていた）とは異なるものとなった。水間の自己嫌悪感尺度は生活全般での自己嫌悪感の経験の頻度を測定するものであり、本研究で使用した項目は対人場面領域での自己嫌悪感を扱うものであった。また、対人的自己嫌悪感を間接的に意味する項目含まれていたため、今後データを蓄積することによって自己意識と自己嫌悪感（対人的自己嫌悪感）との関係を明確にする必要がある。

なお、目的の部分で対人的自己嫌悪感との関係を検討する中で、公的自己への注目が、負の感情（否定的感情）を、さらにそれによって私的自己への注目が喚起される可能性に言及した。この反対の関係も当然考えられる。つまり自身の考え、感情や動機などへの注目である私的自己への注目は、それが観念的な私的自己への注目でない限りは、自身の言動や生活への参照、つまり公的自己への注目が行われるはずである。これらは少なくとも過去や現在からそう遠くない過去に関しては妥当するであろう。

引用文献

- Duval, S. & Wicklund, R. A. (1972) A theory of objective self-awareness. New York: Academic Press
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. (1975) Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 522-527.
- Fenigstein, A. (1984) Self-consciousness and overperception of self as a target. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 544-554.
- 石原俊一・水野邦夫（1992）改訂セルフ・モニタリング尺度の検討 心理学研究, 63, 47-50.
- 金子智昭（2017）大学生の自己意識に関する研究：改訂版自己意識尺度の作成と心理的適応の関連性 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 社会学・心理学・教育学 人間と社会の探究, 84, 15-33.
- 上地雄一郎・宮下一博（2009）対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性、自己不一致、自尊感情の関連性 パーソナリティ研究, 17, 280-291.

- 水間玲子 (1996) 自己嫌悪感尺度の作成, 教育心理学研究, 4, 296-302.
- 宮崎貴子・押見輝男 (2009) 公的自己意識と状態自己消耗が社会的排斥の意思決定に及ぼす効果 立教大学心理学研究, 51, 69-79.
- 谷芳恵 (2010) 公共場面における迷惑行為に対する罪悪感: 共感性, 公的自己意識, 私的自己意識との関連から 神戸大学大学院人間発達環境学研究所研究紀要 3 (2), 21-26.
- 大久保暢俊・下田俊介・鈴木公啓 (2015) 社会的比較傾向と自己意識特性の関係 東洋大学人間科学総合研究所紀要, 17, 137-143.
- 大仁田 あずさ・崔光善 (2013) 女子高生の身体像、自己意識と痩せ願望が摂食行動異常傾向に及ぼす影響 中村学園大学薬膳科学研究所研究紀要, 6, 53-63.
- 中間玲子 (2012) 青年期の自己意識の発達の变化 (1) —理想自己と自己意識特性との関連 日本教育心理学会第54 総会発表論文集, 247.
- 押見輝男 (1990) “自己の姿への注目” の段階 中村陽吉 (編) “自己過程” の社会心理学 東京大学出版会 21-65.
- 押見輝男 (1992) 自分を見つめる自分—自己フォーカスの社会心理学— サイエンス社
- 押見輝男 (1994) 自己意識特性と同調行動—同調動機と課題関心度の調節効果—
- 押見輝男 (2000) 自己意識特性と同調行動 同調動機と課題関心度の調節効果: 同調動機と課題関心度の調節効果 心理学研究, 71, 338-344.
- 押見輝男・渡辺浪二・石川直弘 (1986) 自己意識尺度の検討 立教大学心理学科研究年報, 28, 1-15.
- 菅原健介 (1984) 自己意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, 55, 184-188.
- 菅原健介 (1986) 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求—公的自己意識の強い人に見られる2つの欲求について 心理学研究, 57, 134-140.
- 詫間武俊 (1978) 青年の心理 培風館
- 外山美樹 (2002) 社会的比較志向性と心理的特性との関連 —社会的比較志向性尺度を作成し—
- 植木陽子・葛西圭子・後藤真由美・普川くみ子・松本恒之 (2000) 大学生におけるストレス反応と自己の諸側面について 東洋大学児童相談研究, 19, 17-26.
- Wicklund, R. A. & Duval, S. (1971) Opinion change and performance facilitation as a result of objective self-awareness. *Journal of Experimental Social Psychology*, 7, 319-342.
- Wicklund, R. A. & Hormuth, S. E. (1981) On the functions of the self: A reply to Hull and Levy, *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 1029-1037.